

広島俳句倶楽部

令和五年三月作品集

スキーに行く ふじ女

スキーは、好きで行くのに、いざ行くとなると面倒になるものだ。ウェアを、雨具やら登山用品やらを、いろいろを引き出しから引つ張り出す。早起き、運転、忘れ物。山道も長い。ぶつくさ言うが、到着すると楽しい。雪景色が良い。走っていても速い。ご飯が美味しい。ドライブがてら、帰りは違う道を通ったら、ダムに落ちそうなお道だった。ふとしたことで簡単に違うところに行けてしまうので、やっぱりフラフラとスキーに行ってしまうのだろうか。

スキー行く準備の朝の眠気かな

地上から消失雪の後続車

ペンギンも人間もいるスキー場

雪眼鏡身内他人も知人かな

休憩のチヨコはバキンと息白し

手袋で小突くりフトを待つ男子

膝裏に冷たきリフト振動す

足下を行き交う小人スキーヤー

結界やリフト降り場の冬木立

ストックに手袋干して歓談す

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

楽しい特別作品である。

スキーに行く朝の面倒な支度から始まり、ドライブ、ゲレンデの面白さ、不思議さ、そして、やはりスキーは楽しい、と読み手にしっかりと伝わってくる。私も久し振りに思いっきりスキーをしたくなった。

ペンギンも人間もいるスキー場

旭山動物園がスキー場になったらこうなる。

そうだとするとどがきり楽しいが、ペンギンのような着ぐるみを着て、子どもが遊んでいるのだ、きつと。

雪眼鏡身内他人も知人かな

こけたと言い、疲れたと言って、笑っている。笑顔にサングラスをすると、みな同じような美男美女に見えるから不思議だ。

手袋で小突くりフトを待つ男子

いつの世も、男子はじゃれあってばかりなのだ。

足下を行き交う小人スキーヤー

リフトから下を見ると、おや、木々の間にコロボックルが滑っているではないか。

結界やリフト降り場の冬木立

リフトを降りて木立で向きを変えようと、そこからはこぶだらけの急斜面。滑るぞ、！

黒部、信濃路の旅 松田裕子

五年前の十一月初旬、夫と「黒部アルペンルートと上高地、白川郷の旅」のツアーに参加しました。紅葉には遅すぎたと思いますが、宇奈月駅から樺平までのトロコ列車から見た黒部川の遠き通った緑の水と紅葉のコントラストが素晴らしい、今でも目に焼きついてます。ケーブルカー、トロリーバスと乗り継ぎ、立山の室堂に着いた時は、一面の雪景色と真の青空、それに、ナナカマドの赤い実、すべてに感動しました。楽しかった七日間のツアーでした。

冬の郷手にあたたかき五平餅

しばらくは林檎畑や立山線

室堂は眩しいほどの深雪晴

時雨るるやかすかに望む能登半島

寒暁の流れ激しき黒部川

北吹いて棒に巻き付くツアー旗

信濃路をそぞろに歩く冬帽子

七竈一粒づつに日の差して

露天湯に首まで沈み冬灯

冬の駅ちりぢりに去る旅仲間

《作品鑑賞》

あざみ

真蒼な空、ダム湖の青、伸びきった枝に七竈の赤、澄み切った空気の中、素敵な旅をされたのだと思います。しかも、俳句は平明な文体で即物具象、対象をしっかりと写生されており、楽しく読ませて頂きました。私も二度ばかり旅行したことがあるので、その当時を思い起こし、たいへん親しみを感ずりました。

冬の郷手にあたたかき五平餅

かの地の郷土料理でタレがおいしい。地方性があり幸福感があり、食べ物、句を美味しく詠んでおられます。

時雨るるやかすかに望む能登半島

バスか汽車の窓から眺めておられるのか、海岸線は長く、日本海の波の荒さと外の寒さも感じ、景を切り取る目のつけどころに余情を感じました。

北吹いて棒に巻き付くツアー旗

誰もが経験している事柄を新鮮な切り口と平明な言葉で綴られており、お上手だと感じしました。

信濃路をそぞろに歩く冬帽子

お揃いの冬帽子でしょうか。「仁」の助詞で、微笑ましく仲の良いご夫婦のご様子が浮かんできました。

七竈、露天湯の句も表現が豊かです。そして、最後の句は、締めくくりにシンブルにご自分を表現しておられ、調べよく詠みあげておられました。楽しかった旅のご様子に、私ももう一度行きたいと誘われました。

佐保光俊

それぞれの山によき名や雪の降る

大山も蒜山も見え雪樂し

村上正人

雪降つて川の流れの黒きかな

雪免置いてカフエと招き入れ

高尾ひとみ

雪の日のべランダに来る雀かな

雪の夜の明けて晴れたるけふの空

秋沙

雪うさぎ南天の実の目玉かな

雪の間に日矢の差したる冬の空

あざみ

目覚めれば畑に積りて春の雪

春の雪庭に積りて暮れにけり

亜矢

髪に雪のせて帰れる母迎ふ

コンサート果て足早に夜の雪

綾乃

転けぬよう気遣ふ声や雪の朝

風花やいもうと強き母となり

井藤希

山風に俄かに雪の混じりたる

雲間より夕日の照らす屋根の雪

栄吉

塾終り迎への列に春の雪

別れ雪今朝は野鳥も来ぬやうな

大畑恵

真夜中の雪の降り積む音を聞く

踏み跡のなき道を行く雪の朝

暁子

雪深き峽に朝の日差かな

朝の雪いつもの岐路で子と別れ

すみれ

雪しまく見る見るうちに道真白

除雪車の雪で脇道塞がれて

知佳子

小走りに初雪見ゆる窓辺へと

雪しまく連れの声だけ聞こえる

ちどり

雪解やライムグリーンの靴を履く

春の雪今朝見た夢を母語る

辻純江

雪降つて静かや吾に天寿あり

雪の窓玻璃戸の内のホットティー

雲雀

雪兔窓辺に置いて眺めたる

雪舞うて息子を案じ空を見る

ふじ女

冠雪二つてちようど良く出来た

雪の声地響きとなる駐車場

松田裕子

篁の揺れて新雪散らしけり

真夜中の雪の轍の消えてをり

村上理江

古里も雪積もりぬと便りあり

長靴の足跡青し雪明り

森口良樹

夕暮の薨に雪の解け残る

見送れるテールランプに雪の舞ふ

遠藤さつき

朝の雪子らの足跡くつきりと

金川昭子

雪かぶり水仙の芽が少し見ゆ

上島康子

雪の朝電車通りは静かなり

河原静子

南天の枝しなるほど雪つもる

紀英子

融雪初日に照らされて光りをり

熊谷ゆり子

粉雪や日が一窓に見て

桑門わかこ

知らぬ間に雪の降り出し藪椿

須美れい

青空の太陽眩し雪の舞ふ

高嶋絹代

雪踏んで上杉神社の守り受く

高梨英子

構内のコンテナに雪積もりけり

民

鈍色の雲つぎつぎに雪降らす

友岡葉山子

ノーマルのタイヤのままに雪の朝

中野明美

この雪は故郷の空も降りぬべし

撫子

目覚むれば車窓はすでに雪景色

みさ子

雪の夜ボレロの出だし聴いてる

美耶

雪の中一羽の鴉舞ひ降るる

山野ウタ

雪うさぎ背中に指の跡残り

国分寺跡ある町に氷張る

どこまでも雪のどんびの流れけり

水仙や時折り人とすれ違ふ

薄氷の池の脇ゆく大路かな

円墳の傍に冬菜を育てをり

円墳を見て帰る道雪が降る

新しき道の通ひて春の山

梅咲いてほどなく道はどん詰まり

寒戻る岩にひよどり遊びをり

向うから人の来てる春の泥

城濠を東風吹き抜けてゐたるかな

梅の下進善供養始まりぬ

時折の風に音立て春障子

長閑かな三方良しの講話聞く

春雨の橋を渡つて人訪ぬ

早朝に参る社の木の芽かな

ワグナーの歌劇観てゐる日永かな

春風に揺るるリーフのイヤリング

春日差すカールの睫毛まばたきす

そよ風の額撫でたる弥生かな

竹林のそよともせず冬の雲

朧梅にいく度顔を寄せたるや

天心に早春の月澄みわたり

春浅し遠くの山のよく見ゆる

咲き初むる香りほのかや梅の花

梅咲いて日の差しかかる鳥と吾

庭の木の日差の中の目白かな

春の空鸞も鴉も高く舞ふ

春の雨まづ池の面に見えにけり

小枝踏む音に頬白飛んでゆき

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

枯葦の枝に飛び来る雀かな

尾長鴨川岸に沿ひ泳ぎたり

尾長鴨川に潜りて浮き上がる

前庭に咲きたり紅白の椿

枝先に二つ花咲く紅椿

そよ風に微かに揺るる白椿

朝東風の空へ川鶉の飛び立てり

大樟の根方に蓬萌えにけり

春光やカヌーが橋をくぐりたる

潮干潟に立ちて川鶉の番かな

秋沙

島の上あはく昇りし春の月

鶯かな弥生の空に輪を描いて

小さき雛ワイングラスに飾りけり

春うららあれこれ選ぶ靴の店

春耕の媪の声の大きなこと

種袋花の絵を見て買いにけり

手の幅を物差しにして茄子植うる

箸を止めしばらく聞ける初音かな

後になり光になりして白き蝶

パン焼けて朝の鶯聞こえくる

あざみ

校庭に球児の声や冬の月

胼の手やデイスービスの支度する

言ひ訳をすぐに言ふ子とおでんかな

日脚伸び屋根の真白き美術館

ロールパンに卵をはさむ春隣

翻る質屋の暖簾二月尽

春日差す部屋で柑橘類張れり

ウクライナの民謡を聴く春灯

受験の子母と鉛筆選びたる

受験の日砂糖多めの卵焼

亜矢

故郷や土匂ひ立つ母の庭

山笑ふ友と作りし秘密基地

春の夜や土工らの背の甲斐甲斐し

蒲公英の絮毛車内をただよへり

さまざまな生き方のあり春愁ひ

春光や喉鳴らし来る鳩の居て

療養の我が身に春日優しくて

春光の水面を分かつ遊覧船

花の頃祖父は施設に入るらし

亡き夫の世話を焼きたる春の夢

綾乃

梅薔み障子閉ぢたる茶室かな

立ち止まり立ち止まりして梅見かな

梅林や歩調合うたる夫婦連れ

若人の茶を振る舞はれ梅まつり

老梅の花の白さや午後の雨

鯉の背が水面に見えて春の雷

百千鳥てんでに鳴ける岸辺かな

春風や振り返りつつ土手をゆく

山遠く春野の風を歩きをり

似鳥や若布とる子の声高く

井藤希

斑雪梅の名所の案内来る

梅の花名前も知らぬ鳥も居る

新しき木の壁立ちて紫木蓮

春の雨天守閣まで歩きたり

げんげ田や縫ふやうに行く小型バス

げんげ田や郵便バイク速はずに

タンポポに話しかけたる河川敷

紅梅や喉潤して腰伸ばし

はくれんが夜道に浮かぶ城下町

雪柳暗きに慣れて通る道

栄吉

山椿道沿ひに咲き落ちにけり

旅人の訪ねて来たる梅の寺

島巡り着きたる河津桜かな

芹摘んで母と谷間を辿りけり

杉の花母の忌に行く土佐路かな

土佐路行く山は霞に覆はれて

店先の土佐文旦の香りかな

春北風異国の人の二人旅

アメリカの人で賑はふ桜かな

菜の花は今が盛りや土佐路ゆく

大畑恵

菜の花の道はいつしか海辺へと

木の芽風砂場の砂の入れ替はり

その木だけ鳥の集まる春の森

鳥曇薨の先に海が見え

寺町の小路隔てて緑摘む

花の芽の膨らむ土手の普請かな

青饅や姉と故郷の話して

囀りの林抜けければ天守見ゆ

風光る坂に吹奏楽聞こえ

白壁に支へ柱や花の寺

暁子

春泥を踏んで畑へ菜屑捨つ

畦焼の煙の匂ひに立ち止まる

落椿踏んで辿りし父母の墓

穂やかな日差しの中に雛流す

下校子の賑やかな声木の芽風

裏山に木の芽ざわつき暮れ泥む

車窓から見ゆるミモザの花優し

春の月屋根を照らして明るきよ

春の月蕪村の名句讀んで

炊飯の電子音する日永かな

すみれ

谷間より人の声して春の雪

上流へ道狭まりて花馬酔木

ムスカリの傍を土手へと駆け上がる

枝垂梅揺るる辺りに鳥の居て

人声の遠くに聞こえ梅真白

行きずりの人と語らふ梅日和

近寄りて落椿見る朝かな

初蝶の日照雨の橋を渡りけり

春の宵ふたたび海の見ゆるまで

少しだけ朧月夜を歩きたり

知佳子

古草を掻き分けて取る露の臺

探しては露の臺かと尋ねる子

峠から下りあちこち梅の花

新聞を取りては梅を眺めたる

菜の花の一気に伸びて咲きにけり

菜の花や瀬戸内海を見下ろして

壺に挿し桃満開となりけり

菱餅を夫と作りて子に配る

春の川曲がりくねつて流れけり

家の窓みな開け放ち春の風

ちどり

臘梅の花老いてゆく潦

紅梅の一輪咲いて今朝の雨

青き踏む車跡呼の謎を語りつ

蘆の角川に干満ありにけり

金星に木星近し雛祭

ピカソ展青の時代や春の雨

薬や歩いて強くする身体

青胡桃諏訪湖を出づる天竜川

青胡桃信濃の日暮はやく来る

午後からは雨の予報や蟻の列

辻純江

春來る誘ひに乘つて旅支度

枝を持ち梅一輪を嗅いでをり

大樟をそよと春風過ぎゆける

春風に葉の転がるを見て歩く

昨年と同じこの道土筆摘む

村人に路味増貫ふ麓かな

筍を掘つて帰れと言ひくれし

しばらくを春夕焼の丘に立つ

鱒を焼く隣を真似て七輪で

のどけしや消壺どこかと夫の言ふ

雲雀

春雨や郵便ボストの口が濡れ

春塵や勘違いした道をゆく

黄砂来て遠き乾きと繋がりぬ

道を切る工事の人と落椿

東風吹くや残されたコスプレの尻尾

山椿誰か並べて塀の上

崩落の日の当たる道山椿

干潮の階段黒し鳥帰る

百段の石の階段董咲く

蜥蜴来てソフトクリームの片手かな

ふじ女

日の当たる方の薄氷溶け始む

朝の日に音なく溶ける薄氷

てのひらの薄氷すぐに氷となり

白梅の一枝折つて瓶に挿す

ほころびし紅梅雨に萎みさう

箒の手休め紅梅見上げたり

ニタ手から令流したる雪解川

雪解川土を削つて曲りけり

岩を避け岩を乗り越え雪解川

びつしりと公孫樹大樹の芽吹きかな

松田裕子

自転車の音に散りたる猫の恋

鉛筆の木の香りたる春夜かな

天気予報当たりて雪の別れかな

茶柱を飲み干す朝や鳥雲に

頬白や父への手紙書き始む

春夕焼吾の鏡に映し取る

シヤガールの暦捲りて弥生かな

踏青や昼の三日月眺めつつ

雑木に朝日あたりて山笑ふ

比治山の猫集ひをり春の星

村上理江

偽電話着にしたりおでん酒

ペダル踏む頬の風にも四温かな

梅が香を褒めて始まる玄話

バス釣りのダム湖に響く初音かな

うららかやリュックの底にコップ酒

勤続は三十五年鳥雲に

移住者と地下の育てる二輪草

朝燕アーケードより飛び出せる

妻が祖父呼んで昼餉や花豌豆

遠くから子を呼び戻す干潟かな

森口良樹

のどけしやラジオを腰に野良仕事

退院の母を迎へに梅日和

藪抜けて下る川原の初音かな

土竜穴崩し崩して耕せり

クレーンの持ち上げてゐる春の泥

牛の声厨に聞いて春の昼

椿咲く生垣を来て生家跡

土手に来るドーベルマンや風光る

句帳持ち友と並んで土筆摘む

山野ウタ

雪解けの川の流れの沓立ちぬ

山寺の冬の塵掃く時期となり

名残り雪思ひもかけず積もりけり

防風も添へてお斎を整ふる

彼岸前寺苑掃除に日の暮るる

種物を買へば思はぬ出費かな

峠越え菜の花畑遠く見ゆ

菜の花の坂とんとんと下りたる

門前の漬物屋に入る日永かな

玄関に杖を忘れて日永かな

さへづりの頭上において骨納む

兄弟の笑ひ声する春の昼

早春の縁側で聴くビバルディ

引越しの車が通る雪解川

招待の返事書きをり春炬燵

自転車で廻る巡査や春の風

位職と幼馴染みや春の庭

薄茶よし濃茶なほよし桜餅

紀英子

桑門わかこ

高梨英子

観音堂過ぎ春泥の道となる

暮遅し化粧の井戸を覗き見る

落椿同心内に広がりぬ

幼子の覗き込みたる董かな

歳時記に花びら落ちて春の昼

弥山から二人見てゐる春の雲

撫子

ぐるり見る空一面の春日かな

誰が爲にあらねど優雅しだれ梅

しだれ梅絵筆をすすぐ音のして

帳薄閉つ定年の日の桜かな

桜花ふれてみたくて手を伸ばす

須美れい

春泥を過つてゆけり二羽の鶯

納戸まで聞こえてをりぬ百千鳥

海岸にはしやぐ親子や日の永し

鳥巡る船行き来して花曇

大桜犬の頭にひらひらと

美耶

春炬燵菓子のおみて鶴を折り

足跡を表へと掃き春の泥

スネボーの音戻り来る日の永し

沖に出てヨット行き交ふ春の海

熊谷ゆり子

目薬をさす左目や日の永し

新しき眼鏡の中の桜かな

仏壇に庭の桜を供へけり

輪になつて作るミモザのリースかな

高嶋絹代

転ばぬか春泥の中吾子駆くる

朝市の春子探しつ巡りたる

夕暮に土起こす音日永かな

頂の雲入れ替り山笑ふ

民

佗助を手桶に活けて湯田の宿

春泥に小さき足と犬の足

立ち話時を忘れて日永かな

送梅や送りし姉の香りかな

友岡葉山子

夕日差す土手の草むらつくしんぼ

垣根越し日ごと賑らむ白木蓮

縁側で孫と本読む春日和

金川昭子

囃や子の待つてゐる信子機

八階のビルにも来たり春の鳥

卒業や講堂の床冷たくて

上島康子

春園式親子の胸に花飾り

春休み子らの元氣な笑ひ声

菜の花に蝶の飛び交ふ昼さがり

河原静子

春泥の運動靴とハイヒール

背中まで春の泥跳ね子ら遊ぶ

かたこととランドセル揺れ風光る

みさ子

白梅の咲いて吹かれて散れる里

永き日やひとり剣玉してをりぬ

さりげなく薔薇の花芽の日々伸びて

やす保

令和五年二月度作品集より

松田裕子 私の選んだ十句

寒 昂 大路 は 山 の 間 行 き	佐 保 光 俊
よう来た と 鶴 の 後 を 追 ひ に け り	高 尾 ひ と み
愛 犬 の 足 跡 辿 る 磯 遊	栄 吉
母 の 寝 間 ほ ど よ く 湯 気 を 立 て て お く	綾 乃
校 庭 に と ん ど の 組 ま れ 参 観 日	す み れ
桃 咲 く や 母 は 実 家 に 戻 り た り	ち ど り
仏 冴 ゆ 三 十 三 間 堂 訪 へ ば	雲 雀
団 子 屋 に 開 け つ 放 し の 春 来 た る	ふ じ 女
地 下 街 に シ ョ パ ン 流 る る 二 月 か な	村 上 理 江
新 し き パ ン 屋 の で き て 街 二 月	桑 門 わ か こ

森口良樹 私の選んだ十句

寒 昂 大路 は 山 の 間 行 き	佐 保 光 俊
まだ 明 け ぬ 空 に 月 あ り 春 立 ち ぬ	村 上 正 人
春 の 昼 甲 羅 干 し す る 亀 眺 む	あ ぎ み
体 調 を 患 者 に 問 う て 衾 雪	綾 乃
夜 気 迫 り 雨 戸 閉 て れ ば 春 霽	栄 吉
神 主 と 花 木 の 話 日 脚 伸 ぶ	暁 子
立 春 や 晴 れ の ち 曇 り の ち 晴 れ て	辻 純 江
い そ い そ と 女 正 月 靴 を 履 き	雲 雀
裸 木 の メ タ セ コ イ ア の 直 立 す	松 田 裕 子
冬 枯 に 鉄 打 つ 父 や 里 の 畑	中 野 明 美